昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十三年四月五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二二七号）

慈光

第二十巻　第四号

目次

自然法爾は信仰円熟の極致也……近角常観…(1)
愛と求道
近角師著「親鸞聖人の信仰」③……福島政雄…(8)
63.7.22 ⑨ 救われぬもの……石心居士…(12)
63.7.22 ⑨ 一道会の記(二)……榊原徳草…(16)

自然法爾は信仰円熟の極致也

近角常観

親鸞聖人晩年におよび信仰円熟の境に達し、孔子が所謂七十にして心の欲するところにしたがえども規（のり）を越えざる域におよび、常に法を説いてのたまわく

「自然法爾、義なきを義とすと信知すべし」

と。けだしその意義深遠にして吾人たやすくその境をうかがう能わずといえども、けだしこれ人生にして、その理想と合し、その行うところ、その考うるところ、皆仏天の指示するところと一致して、益々仏陀の境界の不可思議なるに仰嘆（ごうたん）して、言語道断し、心行（しんぎょう）滅するところ、遂に、自然法爾の四字をもって讃嘆したまいて、又先師（法然）の義なきを義とすといえる金言を反覆（はんぷく）して、その余韻（よいん）の嫋々（じょうじょう）たるものあるを味いたまうにあらざらんや。

吾人常に人生における最終の問題に接するや、心中奥底にささやきて曰く「自然法爾、義なきを義とせよ」と。たちまちにして渙然（かんぜん）として氷の日に解くるが如し

吾人人生において常に意外なる奇蹟を見聞し、不可思議なる事実を実験す。心中たちまちにしてうなずきて曰く、自然法爾、義なきを義とすとはこの如きの霊境ならくのみと。その他百千無量の場合において、百千無量の意義を持ちきたして、吾人に絶対の偉大なる力を得せしめたまう徳音は、まことに自然法爾の文字なるかな。

自然法爾、文字すでに力を用いざるを示す、しかしてその意義たるや、絶対の力をあらわしきたりて、一切万物その規道の下に動くこと、あたかも水の低きにつき、石の下に落つるの自然なる如く、花咲き鳥歌うの法爾たるが如くなるを想起せしむ。けだしこれ自然法爾、力を用いずして最も力のあらわれたるものたらずんばあらず。

世の偉大なる力と称し、驚くべき力と歎ずる所以（ゆえん）のもの某々二三の事実が、他の平々凡々たる事実に比していちじるしき場合に発する言語のみ、この如きは人生相対の境界において目を驚かしむると言えるのみ。

然れども若し絶対の霊光を仰ぐときは、天下の事物、何物かこの驚くべき力を蒙らざるものやある。称して奇蹟と

云い、不可思議と嘆ず、これ人生の標準よりして言えるの言ならくのみ。もし頭をめぐらして四方をかえりみる、愕然として歎ずらく、嗚呼、人生は皆奇蹟なり、みな不可思議なりと。

しかしてその霊境たるや、皆仏陀大悲の渕源より発動せざるものなし。ここにおいてや、某々二三の事実のみにあらずして、人生におけるすべてが、この偉大なる力の範囲以外に逸せざるものなきを発見せん。ここにおいてや、自然法爾、最も力を用いざる言語は、絶対の力をあらわすの言語となれり。

親鸞聖人年八十八、自らその多年の実験を以って、その円熟せる霊境を円満なる霊筆をもって、親切に吾人に解き教えてのたまわく。

自然（じねん）というは、自はおのずからという。行者のはからいにあらず。然（ねん）というはしからしむという言葉なり、しからしむというは、行者のはからいにあらず、如来の誓にてあるが故に法爾（ほうに）という。

法爾というはこの如来の御ちかいなるが故にしからしむるを法爾というなり、法爾はこの御ちかいなりける故におおよそ行者のはからいのなきをもて、この法の徳のゆえにしからしむというなり。すべての人のはじめてはからわざるなり。このゆえに義なきを義とすとしるべきなり

嗚呼文字すでに渾然として環（たまき）の端（はし）なきが如し。いわんやその意義、醇熟（じゅんじゅく）人をしてそぞろに如来の光明の中に酔わしめんとするものあり。しかして訓詁（くんこ）をもって論ずれば最も不自然なる解釈にもかかわらず、その信念の発動にいたりては法爾として萬徳円備の霊境眼前に髣髴たるを感ぜずんばあらず。まことに自然法爾なる文字をもって自然法爾の境界を、自然法爾の事実をもって教えたまいしものと鑽仰すべきなり。

親鸞聖人「信巻末」において、信心歓喜の実感を技歴（ひれき）して、遂に現生十種（げんしょうじっしゅ）の利益をかぞえたまえり。みなこれ自然法爾の徳たらざるなし。けだし聖人が多年の実験の結晶凝結したる生産たらずんばあらず。

吾人常に聖人の人格を追慕して、しきりに聖人の実験を追想す、しかしてみずからおもえらく、我聖人の味わいたまいし霊境をうかがうを得たりと。しかしてのち実験の深まるに及びて、遽然（きょぜん）としてかえりみて独り自ら前日の実験の浅薄たりしをはじざるはなし。吾人過去をかえりみて将来を想像するときは、聖人の実験の泉が如何に深遠なるかは知るべからず。むべなるかな、これ聖人満

九十歳における信仰の実験なるおや。いわんやこれ大悲の、渕源より汲みたまえるにおいておや。七百年間、こん〳〵として尽きざるもの、決して故なきにあらざるなり。しかしてその流や益々とこしえにして尽きざるゆえんのものは、聖人本来自然法爾にまかせて、力を用いて故意に開鑿したまわざりしに渕源せずんばあらず。この如き聖人の実験は吾人のよくはかるところならんや。もとより信仰の味いにいたりては、同一醎味、いわゆる品位階次なしといえども、その信仰以後の修養のいたれる、髣髴として仏陀に咫尺し、融々として霊界の間に翺翔するの霊境にいたりては、吾人あに聖人が広廓なる心中を羨慕したてまつらずんばあらず。

かの現生十種の益の如き吾人の短き実験によりてこれを徴するも、その意義の深遠なること言うべからず、請うこれを信仰の実例に徴せんか。

信仰の人は軍中刀火の間において敵難をまぬかれ、獄中桎梏おのずから脱せずして釈然として解脱を得たり。あにこれ冥衆護持（みょうしゅうごじ）の益にあらずや。いわんや、天神地祇、日月星辰は無碍の一道の人を護持養育したもうにおいておや。

又念仏の人は自らその理由を知らずして心おのずから和融し、病あるの人も、苦に堪えざるの人も期せずして遂に一大光明に接せり。いわんや信仰以後の経験において、現世の幸福期せずしてきたり、人生の調和たちまちにして成る、これあに至徳具足（しとくぐそく）の益にあらずや。

信仰は実に内心の革命なり、精神の改造なり、不真面目なる人も一変して真摯の人となり、軽薄なるの人も忽ちにして謹厳なる人格となる。剣を執りて親を驚かしたる人も死に臨みてその罪を悔い、酒色に溺れたる者も翻然としてその本心にかえる。これあに転悪成善（てんあくじょうぜん）の益にあらずや。

仏陀の智慧は凝りて文珠の人格と化し、如来の慈悲は鍾まりて観音の妙力を現ず。しかしてこの如き仏菩薩つねに吾人信仰の徒を護念したまうこと、あだかも母の子を護念するが如けんのみ。吾人しばしばその引導を蒙る、聖人が二菩薩の引導に順じて如来の本願をひろむるにありと断言したまいし如き、如何に仏境に円融し、霊界と道交したまいしかを思わずんば非ず。これあに諸仏護念の（しょぶつごねん）の益に非ずや。

すでにこの如く諸仏菩薩に咫尺す。諸仏菩薩、信仏伝法の行為をみそなわして称讃の声を放ちたまわざらんや。『化身土巻』の冥衆護持において、聖人の実感を味いたてまつるの人は、また阿弥陀経の六方恒沙の諸仏の証誠称讃

（しょうじょうしょうさん）のなお偉大なる霊感を蒙らざることやある。広長の舌相を出してあまねく三千大千世界を覆うという、何ぞその思想の広大なる。しかして吾人その形容の大なるに驚いてその事実の人生の上に実現するをさとらず、世の所謂奇蹟と云い不可思議というが如き、みなこれ人生の上に示したまいし諸仏の証誠にあらずや。若し現世の利益を蒙りて法に入れるの人は、利益を得たるがために非ずして法の徳のおのずからしからしむるの偉大なるに感泣すればなり。いわんや、一仏の化するところは一切仏の化するところ、一仏の満足したまうところは一切仏の満足したまうところ。諸仏は同体の大悲にして、菩薩法臣一つに本地法王の慈悲を伝うるの満足なるにおいておや。

吾人近時もつとも不可思議に堪えざるは、仏教各宗における敬虔（けいけん）なる信念が、唯一の仏陀を中心として絶対他力の安住に帰一するにあり。或は覚しゃく上人の信仰を味わい、或は慈雲尊者の人格を尊崇し、或は日蓮宗の僧にして十界三千自ら心を苦しむるのみなるを実験してただちに如来の大悲に泣く。しかして自ら所信を説きて諄々として郷党を感化し、同輩の攻撃に対してすこしも痛痒を感ぜず。これ真個に日蓮の徒、地下の上人その髄を得たるをよみしたまうべし。かつはかってキリスト教の教育を受けたるの人、子の早世によりて仏陀の引接を感じ、又その信仰に経験ある人、仏陀大慈の広懐を味わいて無上の安慰をうくるが如き、諸仏菩薩、各宗各派、滔々として大海に流れ来ること、いわゆる滿繩（しじょう）の一味なるが如き傾向を示しきたる。吾人は遂に仏智海の滉瀁浩汗（こうようこうかん）として辺涯なきに仰歎せずんばあらざるなり。

ひるがえって吾人、日常の生活をかえりみる。たちまちにして瞋恚の炎に焼かれ、時として貪欲の水に溺る、幸に摂取の光明ありて大悲倦むことなくして我を照らし給う。

聖人歎じて曰く。摂取心光は常に照護したまう、すでによく無明の闇を破るといえども、貪愛瞋憎の雲霧、つねに真実信心の天に覆えり。たとえば日光の雲霧におおわるれども雲霧の下あきらかにして闇なきが如し、と。実にこれ信仰生活の要点なり。我雲を排せんとす、雲密に閉じて開かず、唯大悲を仰げば雲おのずから開きて親しく仏日を拝す。親しく仏日を拝して他人に対す、他人また雲を開きて共に慈光に浴す、これあに心光照護の益にあらずや。

それ信心開発の時刻の来る、遂に測るべからず。あだかも天地一時に破壊し去りて世界光明をもって満たさるが如し。多年の無明たちまち破れ去りて胸臆に湧き来るものは歓喜の霊泉にして、口にあふるるものは感謝の念仏なり山はこれ昨日の山、道はこれ昔日の道、しかして山色喜びて我を迎うるが如く、道またおのずから新なるに似たり。

いわゆる身心悦予の境にあり、これあに心多歓喜（しんたかんぎ）の益にあらずや。

そもそも信仰に達せざる生活は義務の生活なり、苦行の生活なり、自力の生活なり、覿罪（とくざい）の生活なり。しかしてたちまちにこの如き大安慰を得たり、何を以てか仏恩に報い師徳に報ぜんや。こいねがわくば後半生を捧げて仏陀の慈悲を伝えむかな。我若しこの如き光明にあわずんば、たしかに我は煩悶に死せん、我若し仮りに煩悶に死せりとせんか、何ぞ今日の生活あらんや。身を粉にするも以て苦しみとするに足らず、骨を砕くあに辞するところならんや。かって堕獄の苦を恐れて悶絶せし阿闍世王が、諸の衆生のために無量劫の間阿鼻地獄に堕して無量の苦を受くるも苦とせずと云う、この如きの至情、これあに知恩報徳（ちおんほうとく）の益にあらずや。

すでにこの心あり苦悶の人を見て坐視するに忍びんや。すなわち行きて経験を語りこれを慰籍し、窮厄の人あり覚えず立ちてその苦を分つ。けだし吾人人生における僅かに五十年昼夜人を度し、貧を恤わして寸暇なからしむるも、これを仏陀の大悲に比す、大海の一滴にだにも如かず。吾人真個に慈悲を行うは一たび楽土に入りて生死の園林に遊戯する時にあり。然れどもこの如き大慈悲を行わしむるの心は即ち吾人が現在心中において仏陀の大慈悲を感受した

る真実信心の泉より流れ出ずるものたらずんばあらず。故に吾人その信仰の泉を味わえば身心に溢るるものは慈悲の心水なり。これに接しこれに交わるものあにその徳沢にうるおわざるものあらんや。吾人自ら法を説く、仏陀に面接して語るの感あり、聴く人また直接仏陀の光明に接す。

突如として吾我にかえる、自らかえりみて何が故にかくの如き結果を来たすかを知るべからず。「如来の御催しにあずかりて念仏申し候人を我弟子と申すこと極めたる荒涼のことなり」との聖訓まことに適切なり。これ畢竟肉体をとおして仏陀がその慈悲の力を現じたまうものに外ならず。これあに常行大悲（じょうぎょうだいひ）の益にあらずや。

すでにこの如き境に達す、身はこれ肉の一塊、しかれども心はすでに如来に咫尺したてまつる。華厳経に「信心歓喜するものは諸の如来に等し」といい、涅槃経に「大信心は仏性なり、仏性すなわち如来なり」というもの実にこの境にあらずや。大経に「弥勒（みろく）の如し」といい、観経に「観音勢至勝友となる」といい、釈尊また歎じて「我善親友なり、芬陀利華（ふんだりけ）」とのたもう。親鸞聖人晩年に及びてこの感もっとも深かりけん、常にその霊境を歎じたまう、これ入正定聚（にゅうしょうじょうじゅ）の益にあらずや。

以上現生十種の霊感の如き、皆期せずして自ら来り、望まざるに自ら与えらるるもの、これ皆自然の力、法爾の徳たらざるはなし。嗚呼大なる信仰の力は能く活ける理想を遂に人生の上に実現し来りてかくの如く荘厳し給う。

然れども信仰の極致は現在にかぎるべからず。最高の理想は彼岸の楽土にあり。これ即ち涅槃の霊境にして言語をもって説くべからず、想像をもって描くべからず。これ仏陀救済の根本にして人間最終の妙果なり。仏陀これがために顕現したまい、本願これがために建立したまえり。首をめぐらして人生を達観するに一切の群生、結局相ひきいて滔々としてこの境に流入するものたらずんばあらず。今や宗教界の濁れるは、大いに清からんがために非ずや、国民の大いに相戦うは世界の大平和を来たさんがために非ずやこの境に至らんか、善もなく悪もなく、敵もなく味方もなく、同一に念仏して四海皆兄弟となり、恩怨一如（おんえんいちにょ）にして平等無差別の境に達し、一切の男子は皆これ父、一切の女子は皆これ母、相ひきいて彼岸の涅槃の大果に到着し、永劫の楽果をうけざるなし。

これ曠劫の昔より尽未来際にいたるまで無量の仏陀の出現したまい、十方に衆生を救済したまえる一大理想海たらざるなし。真個にこれ常楽寂静（じょうらくじゃくじょう）のきわみなるもの、まことに自然法爾の最終極致たらざるはなし。故に聖人はこの境を描き尽して曰く。

自然というはもとよりしからしむということばなり。弥陀仏の御ちかいのもとより行者のはからいにあらずして南無阿弥陀仏とたのまわせたまいてむかえんとはからわせたまいたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもわぬを自然とは申すぞとききて候。ちかいのようは、無上仏にならしめんと誓いたまえるなり。無上仏ともうすはかたちもなくまします、かたちましまさぬゆえに自然とは申すなり。かたちまさぬようをしらせんとはじめて弥陀仏と申すとぞききならいて候。弥陀仏は自然のようをしらせんりようなり。

嗚呼、弥陀仏は、自然のようを知らせんがために熟慮凝念、（じゅくりょぎようねん）思惟の苦労あり、積功累徳（しゃっくこうるいとく）兆載不可思議永劫の修行あり。しかしてその間、身口意の三業、一念一刹邦も清浄ならざるなく、真実ならざるなく、哀々たる慈悲凝って清浄なる楽土となり、霊々たる智慧鍾まりて百幅の荘厳となる。皆これ如来大悲の心血たらざるはなし。

涅槃経に曰く「如来は一切のために常に慈父母となりたまえり、まさに知るべし、諸の衆生は皆これ如来の子なり

世尊大慈悲、衆のために苦行を修したまうこと、人の鬼魅（きみ）に着せられて、狂乱の所為多きが如し」と。

嗚呼、哀哉、釈迦如来は慈悲の父母として五道の窮子を導かんがために、瓔珞細軟の宝衣を脱して、疎弊垢膩の綴（つづれ）を召し、不軽大士（ふきょうだいし）の昔は、罵詈打擲の邪人をも礼して深心仏性の崇きを顕示したまう。大聖文殊の誓には我を敬うよりは打誚罵軽するものをなおさきに助けんと願じ、竜樹菩薩の別行には、わざと外道の家に生れて捨悪持善の正法を興したまう。

嗚呼、仏海滔々として知るべからず。吾人真にこれ渺たる蒼海の一粟のみ、凡小の小智をもって百千万劫これを測ると雖も、遂に大海の一滴だにも如かざるなり。親鸞聖人いましめて曰く。

この道理を心得つるのちは、この自然のことはつねに沙汰すべきにはあらざるなり。つねに自然を沙汰せば、義なきを義とすということは、なお義のあるになるべし。これは仏智の不思議にてあるなり。

和讃に曰く

聖道門の人はみな自力の心をむねとして
他力不思議にいりぬれば義なきを義とすと信知せり

と、我はからわざるに、仏自らはからわせたまう。けだし、これ先師法然上人が直接聖人にさずけたまいしところにして、深く聖人の実験をうがちたるものなるべし。聖人北越配所五年の居所を経て信州に渉り、常陸に移り、稲田の禅房に隠捿したまうや、幽栖（ゆうせい）を占むといえども、道俗あとをたずね、蓮戸を閉ずといえども、貴賤衢にあふる。仏法弘道の本懐ここに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足せり。聖人歎じて曰く「救世菩薩の告命を受けし古の夢すでに今と符号せり」と。

当時　六軸の聖教（教行信証六巻）成り、聖人の教化一に自然法爾義なきを義とすと知るべしと云えり。聖人没後恵信尼公おわりに臨みて遺言して曰く。

「親鸞の仰せも外の事は候わず。唯はからわず、称名念仏するばかりに候。別に珍らしき事これあり候はば、永き御別れと存じ候。信心に変りなき人々は浄土にて蓮の対面申すべく候」

とあゝこれ自然法爾の極致なり

「求道」第一巻第十一号より

愛書と求道

近角先生著「親鸞聖人の信仰」3

福島政雄

利他願海（りたがんかい）という題で、近角師は先ず「歎異抄」その他からの引用によって、法然上人の仰せが唯一念仏であることを明かにし「他力というは如来の本願力なり」という聖人の言葉の力強さを述べ、自力と他力が対立するものではなく、絶対他力、すなわち仏の慈悲の力の照徹ただ一つであると言い、半自力半他力などというは不徹底であると述べ他利利他と聖人が言われてあることについて、次のように説明せられている。

その他力のことを今ここに利他というは、そもそも何故であるか。この言辞については大に味わうべきことがある。親鸞聖人は教行信証の証の巻の終に、

「宗師は大悲往還の回向（おうげんのえこう）を顕示して慇懃（いんぎん）に他利利他の深義を弘宣し給えり。その他利利他というは如何なることぞというに、仏よりして言えば利他というべし、衆生より言えば他利というべし、まさに知るべし。」

と云うてある。これから見れば、仏陀自ら行える仏の慈悲のかたまりの成就を人に与えるのが利他である。仏から云えば、利他というべきである、他の衆生を利楽するのであるから、それを利楽せられる吾人の方から云うと他利というべきである、他の仏に利せられるのであるから。そこで他利というも利他というも、内容は同じものではあるが、言辞の立て方に左右がある。今ここに物あり、これを引上げるに物から云えば他に引上げられたというべく、力から云えば引上げたと云わねばならぬと同じことである。今ここは仏願力を云わんとするところであるから、利他というが大に明確である。

かの他力という言辞を誤解して、無力と同一視したり、或は半自力半他力に陥る所以のものは、自己を本位として居て、仏陀の偉大なる力が見えぬからである。若し他力の力が願力であると気附けば、直に翻然と自力を捨て

て、全然仏願力に乗托することが出来る。
仏の方から引上げて下さる利他の力を知らずに、口には他力と云いながら自力の回向発願が離れぬゆえ、半自力半他力におちいるのである。
この如き理由があるから、他利の言よりは利他の言を用いたのである。勿論他利というは、他に利せらるるということなれど、絶対の力はあらわれぬ、利他という方が一層力強く、且つ明確である。しばしば云う如く、信仰の極致は一大転換であって、他力回向の真味はここにあるのである。これをよくあらわすは利他の二字であるから、親鸞聖人は大に嘆美して他利利他の深義と云われたこの如く天下を覆うの光、大空を覆うの雨の如き偉大なる利他の本願、これを海の如くたとえて利他の願海と言ったのである。

次に師は信楽開発（しんぎようかいほつ）という題で、信心の開ける有様とその開けた上は、世界がどんな有様に感ぜられるようになるかを説いていられる。

我等の心中に仏陀の真心が到達して、あだかも蓮華の開くが如く、わが心がひらけてしみじみと仏陀を喜ぶ心が生じてくるのであって、これ全く仏陀の偉大なる力である。我心いっとなく仏陀の慈悲が有難く思われて、疑われず、直に心の開けて来たのは、自分がかく有難く思わんとして思われたのでなく、全く如来選択の願心より発起せしめられたのである。親が子を可愛い可愛いと常に絶えず思うていて下さるので、自然に子供の心に有難いという心が起ったのである。
親鸞聖人が「それおもんみれば信楽を獲得することは如来選択（せんじゃく）の願心（がんしん）より発起す」と云われたのは、一寸聞くと何でもないようであるが、斯くの如く云われるのは決して偶然ではない。私自身のことを回想するに、或は宗教上のことを憂い、或は友人のことを憂い、種々なる人生実際の出来事に逢うて種々に考えた。それがために永い間自分の胸中に安心が出来ず、大なる苦におちいった。何とかして安心を求めたいと悶えに悶えた最後において仏陀の恵みが私にわからして下されて、ああ有難いと喜んで安心することが出来たのである。ここにおいてつらつら思うに、久しい昔から私に種々に恵みをかけて居て下されたその仏の願心念力が、私に届いて下されたのであった。
よりて思うに、信巻は親鸞聖人の実験の直写である。聖人の胸中には人生百般の出来事、我を導いて下さる如来願力の御計らいであって、釈尊在世当時の王舎城の大悲

劇も外へ遣ることは出来ぬ。皆色々と手をまわして、凡ての人間を信仰に入るべく導いて下されたのである。
「真心を開闡（かいせん）することは大聖衿哀（こうあい）の善巧（ぜんぎよう）より顕彰せり」と申されたのである。そこで我身がめぐりめぐりて仏の恵みに入って有難い心になったのは、ひとえに仏陀願心の賜であると感謝して居られたのである。
この信心開発ということを、師は獄中の囚人の心持を比喩として説いて居られるが、如何にも適切である。
囚人がどうかして成功したい、何とかせねばならぬ、親許に帰るにも好結果を握って帰らねばならぬ、たとえ出来ぬまでも為さねばならぬと思うのは、まだ親の心がわからぬのである。
また囚人が親は私如きものを憐んで下さる、自分に如何なる間違いがあっても、それをいろいろと善く思うて下さるのが親である、いかなることがあっても捨てて下さらぬ有難い親であると云うて居るから、それなら真実親が解っているかというに、口には親は有難いと云うているが、心底には親の真実がまだ解って居らぬ。その証拠には、直ぐに親元へ帰らぬ。何故かと尋ぬれば、親は寄せて下さるけれども、チットは善くなって帰らねばすまぬ、立派な衣裳でも着て帰らねば面目がない、どうか世間の面目をよくし、土産でも持って帰りたい、今の処では如何にも恥かしいという気である。
然るに「我如き不孝者を昼夜少しも忘れずに待っていて下さるのであったか」と真に親の心を聞かされて見ると、心の奥からああ有難いと喜ぶばかりである。この時に罪があるから帰られぬの、衣裳が悪いからの、土産がないからのと云うて居る余地はない。直ぐに飛んで帰るばかりである。
信仰問題もまたこの如く、大悲の御親の恵みの聞こえた瞬間、彼の願力に乗じて一点の疑慮もなく、定めて往生を得と安心する、これが信楽開発である。身は鉄窓にあっても心は親の処に帰って居るのがいわゆる正定聚である。
次に師は大悲回向ということについて述べられている。仏陀の救済を喜ぶのと自己は罪悪のかたまりであると知るのとは一つであることを「歎異抄」を引用して述べていられる。一つの大悲回向の信心の味わいが願力無窮と罪業深重ということになるのである。大悲回向というは、仏陀が衆生に恵みをめぐらし向けて大悲を注がれる、そこに仏陀の願力が無窮なることが感ぜられ、衆生は罪

業深重の我が姿に目がさめる。師は次のように述べられる。

我々はまことにあさましいもので、他に対して誠実なること能わず、かえって向うを疑い隔てる。こちらからは如何にしても心を開いて向かうことが出来ぬ。この如きものに対して仏陀は誠ならぬものに誠にして下され、疑う者を疑いたまわず、どこまでも恵みを向けて下さる、これが大悲回向であります。

そもそも広大の慈悲の御親、南無阿弥陀仏それ自身がすなわち真実である。よりて「至心（ししん）は至徳（しとく）の尊号を体とす」というてある。真実はすなわち大慈大悲である。よりて「利他回向の至心を以て信楽（しんぎょう）の体とするなり」というがこれである。

いつまでも変らず、あくまで恵んで下さるのである。この如く如来の方から真実慈悲を向けて下さるのが回向である。故に「欲生（よくしょう）というは即ちこれ如来諸有の群生を招喚し給う勅命なり、即ち真実の信楽を以て欲生の体とするなり。誠にこれ大小・凡聖・定散自力の回向にあらず、故に不回向と名づくなり」と云われてある。

それであるから至心、信楽、欲生の三信は三あるにあらずして唯一っである。例せば水の清きは至心、なみなみと湛えてあるは慈悲即信楽、この清く湛えたる水を注ぎかけて下さるが大悲回向とも欲生ともいう、即ち招喚の勅命である。その広大なる仏心、南無阿弥陀仏をなみなみと注ぎ込んで下さるのが如来回向である。この如き広大の信仰であるから、相対的の言辞では何とも云うことが出来ぬ。

師は親鸞聖人の言葉を縦横に引用して述べられるので、よく考えて読まなければその心髄に徹することが出来ないのである。

（昭和四十一年十月十九日稿了）

◉

法の深山

土岐善静

法のみやまのさくら花　昔のままにおうなり
道のしおりのあととめて　さとりの高根の春をみよ

法のみやまのほととぎす　昔のままになのるなり
うき世は夢ぞみじか夜と　おどろきさますこえをきけ

法のみやまの秋の月　昔のままにてらすなり
おしえの風にむねの雲　はらいて真如の月をみる

法のみやまの白雪は　昔のままにつもりなり
みをもすてたるあとふみてふかきおしえのおくをとえ

救われぬもの

石心居士

そもそも私の信仰に関する経験は、昭和五年に私が東大理学部の大学院学生であった時、同じ理学部の大学院学生の日下部智様のお手引きで近角常観先生に会わせていただいたことに始まります。それによって時々先生の御法話を求道会館で拝聴いたし、いつしかお念仏を称えさしていただくようになりました。

当時ただ学生としての私が、大した抵抗もなくこのようになったのは、どうもおかしいのですが、私はその前に綱島梁川氏（仏教的傾向をもったキリスト信者）の見神録に感銘を受けたことがあります。その私がまのあたり大先生の熱烈で御懇切を極めたお導きに驚き、強く打たれざるを得ませんでした

それで、私は「これだ、これだ」と夢中になって仏様にしがみついておりました。ところが、あるときの御法話で「こちらから一生懸命に仏様にしがみついているのは間違いで、そのしがみついている手を放して安心するのである」という意味のお話に驚かされ、今まで一生懸命につかんだ信仰は駄目だと先生に取り上げられてしまった。

それがくやしくて〳〵ならず、ついにこの求道会館に火をつけて焼いてしまいたいとまで思いました。心が滅茶々々になって、お話の続きが全くわからぬまま御法話の終りになってやっと気がしずまりましたが、帰るに帰れず、意を決して、直接両先生（常観・常音先生）の御前でこのことをおそるおそる申しあげました。

大先生には、すこしも驚かれず、意外にも

「自分の得たと思ったものは、もともと空っぽなのだ。それを本物のつもりで居たが、それが空っぽとなれば、そのしてみようのない空っぽが可愛想だと、その空っぽにどこどこまでも注いで下さるお慈悲である」

とのお話に安心させていただきました。

右のように、なおいろいろと大先生に、又のちには常音先生に、御懇切なお教導をいただいたことは限りがありません。

私は昭和六年から九州大学、広島文理科大学（ここでは

親しく福島政雄先生のお導きをいただきました）外国へ留学と、いろいろに移り、昭和九年から三千二年間は大阪大学に奉職いたしました。

昭和十六年十二月に大先生が大往生遊ばされ、二十八年八月には常音先生が次いで御往生あそばされました、それまでも私の信仰生活は懈慢放逸のいたりでありました。常音先生がお病気でその御講話を拝聴できぬようになってからは、全く言語道断、信仰の形ばかりのまねごとさえも打ちすててしまいました。

大字様から常音先生が御重態のおしらせをいただいても何の返信すらもいたさず、御往生のおしらせにも全く答えず、実に何とも全く申訳ない次第でございます。このようなことで、大字様をはじめ近角先生の御縁の方々には誰にもお目にかかることが出来ないようなことになってしまいました。

その頃に一つまことに不思議なことがありました。それは常音先生が御往生遊ばされてから二十日ばかりの頃だったかと思います。夢で私は先生のお床のそばへ参っておりました。先生はすでに亡くなられて床に臥して居られましたが、突然起きあがられ、裸のままで私を横からしっかりと抱きかかえて下さいました。それが実にポカーッと温い生きたお体でありました。大先生の大往生の後、常音先生には幾度もまことに御懇切なお導きにあずかりながら、言語道断の背恩の私。この救われぬ私只一人のために御不思議と拝顧いたします。

しかしなお十数年も、私は仏様のことなどほとんど全く忘れ去ったように、無慚無愧の生活で自分の家庭をもまさに破壊せんとするような放埒ぶりでありました。この仏の御教を全く忘れてしまったような生活の間にも稀には私の胸の奥底に低いが力強く「お前をどこどこまでも棄てぬぞ」とのお声が、何やら頼母しく有難く感ぜられました、

昭和四十一年の末に私は大阪大学を退職し昨年（四十二年）の始めに、東京のカトリック系の上智大学の専任教授となりました。ただしカトリック教の事には何も触れておりません。

昨年六月上旬のある日曜日にひょっこりと日下部様をお訪ねして雑談をいたしました。日下部様は、私がカトリックの大学へ移ったとの報せで「信仰のことはどのようになっているか」とのことでありました。その後間もなく日下部様からいただいたお手紙では「これまでは、私と会っても話が通じないようになってしまっているだろう」と思っておられたそうです。

日下部様にお会したお蔭で芥溜のような私の心に、再び信仰の火が燃えはじめました。そのある日のこと。私の還

歴の祝につき、ある後輩が私の肖像画は如何ですか、との申出を私は断ったことを思い出しました。そして「自分の肖像には大津絵の鬼の念仏の図がふさわしい」と思ってひそかに得意になりました。（その鬼の図にはユーモラスなところがあります）ところで洗面器の上の鏡をのぞいて見てギョーッとしました。それは世にもこんな恐ろしい顔があるのかと、続けて鏡を見ることができませんでした。これで私には、自分にはとても思いも及ばない恐ろしい罪業のひそんでいることを知らされました。

なおその頃は、私は独りで東京のあるマンションに、家族（妻と息子）は大阪の郊外におりました。そのある晩のこと（六月下旬）いつか妻が私に「あなたは自分の息子に対して実に冷酷な人だ」ということを度々言われて、返事が出来なかったことを思い出しました。そして、これはたしかに問題だ、と思ったまま床に入って眠りました。その翌朝、私は自分の感情が全く消失しているのに驚きました。自分には何の価値も意義も感じません。救われたいという気も起りません。たとえ地獄で火に焼かれても何も感じません。地獄へ落ちる値打もない、ここはすでに地獄のドン底だと思いました。そのうち様々に心が狂って、夜だか昼だか、起きているのか寝ているのかさえも区別がつかぬ様になりました。

かくて自分の存在が全く無意味になったので、生きている意味のある他人が恨めしくなり、ついに他人を誰彼の区別もなく殺して見度くなりました。しかしそのうちにまた何やら人間並になり度いという気も起って来て、全くどうにもしようが無くなってしまいました。そして最後に、ただ近角先生にお会いしたいとばかり一筋に思いました。こう思って床に入ったようです。

いつの間にか真暗闇を通って私は近角大先生の御前に出ました。先生は闇の中に光って立っておられ、待ちきれぬような御声で

「サアおいで、サアおいで！」

と私を招きよせられました。そして上から御両手で私の頭を抱えて

「お前の石のような心が可哀想じや。この石の心が可哀想じや」

と繰返し繰返し、まさに御自身のことのように熱い御同情の涙を限りなく注いで下さいました。……そしてふと、常音先生が私のうしろから黙って私を支えていて下さったことを感じました。

間もなく気がついたら朝になっていて、私の寝ていた枕はぐっしょりと涙にぬれていました。まさに還相の御廻向というより私には「我、阿闍世のために涅槃に入らず」と

このまさに救われぬ私一人のために、近角両先生は私の内に生きていて下されたことを感じます。

かくてあらたに燃え上った歓喜法悦の光炎、しかしそれは長続きしませんでした。

後戻り／＼して辿るらん、申斐なきことに心迷いて

昨年の秋のある日、私の妻は「あなたは善い人だが、実に何ともいえない変な人だ」と申しました。「よい人だが」とは外に現じた賢善の相、「何ともいえない変な人」とは内に抱く虚仮不実でありましょう。

浄土真宗に帰すれども　真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて　清浄の心もさらになし

聖人の御和讃を厚顔にもお借りして、そのままに我身に味わせて頂きます。

ああこの救われぬ私只一人のための大悲の御本願、この御不可思議一つに帰命し奉る他はございませぬ。

極重の悪人は唯仏を称すべし
我も亦彼の摂取の中に在れども
煩悩眼を障えて見たてまつらずと雖も
大悲倦（ものう）きことなくして常に我を照したまう

といえり。

南無阿弥陀仏

◆

お粥の念仏

近角師

どんなものも喰べられない病人を、それを見捨てず呆れずして、それに喰べさせて、との親の真実のお粥である。この喰べさせんとの親の真実のあらわれが

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

である。これをいただいて喰べるのが、

「よき人の仰せを蒙りて信ずる他に別の子細なきなり」

である。

それが、信心にかたよると、

「お粥は喰べるよりも訳を知らねば……」

と六つかしく考える人や、念仏称名にかたよると、

「ナニ喰うにかぎる！」

と喰うことばかりに骨折るのはかたよりすぎる。

一道会の記 (5)

榊原徳草

次ぎに向島諦宣先生のお話のあらましを記します。

私は一昨年の十二月一日に母を亡くしました。こんなことがありましたので二年間もこの会に出ませんでした。今日は三年振りで出て参りました。

この会は有難い会でありますが、一つ困ったことは指名されて話をさせられることです。私自身が腹がすいて聞かせていただこうと思って出て来たのですが……。

さて母が亡くなってからの私の感懐は「慈光」に書きましたが、私は母の死によって強く胸打たれましたことは、親不孝者であったということであります。いかに親不孝者であったかということであります。私が親不孝者だったから私の子供から親不孝をされても文句は云えません。四人の子供がありますが、どうも思うようになりません、これは当然の報いでありましょうが、同時に仏法に引き戻され、私が仏様に対すると同じことだと反省させられます。

子供達は私の希望に添ってくれない、私は心に悦ばないが、子供達のことは私の念頭を離れません

これと同じように、母は死ぬまで私のことが気になって私を離れておりませんでした。忙しい中を私にいつも御苦労さまと云ってくれた母、これが仏の心であります。仏は常に可哀想、御苦労様と私に寄り添うていて下さる。そういうことをしみじみ感じるのであります。

話は飛びますが、一つ問題になったのは、西元さんとも話したのですが、曽我量深師が力をこめて言われることは

「心は此世で往生し、身体は来世で成仏する、我々は死んでから往生するというが、往生は此世で、身体が亡くなったときに成仏である」

そういうように説かれますが、一面うがったお話と感じます。先程の白井先生のお話しも、念仏してそれを条件として御浄土へまいる、というのは間違いで、念仏することが救われることで、煩悩に埋まっている中でお念仏する、そこに煩悩が転じて柔和忍辱（にうわにんにく）の心が出てくる、どこかに浄土のひかりがあらわれる。浄土は生きている中で念仏ささ

れる、そこに浄土が感じられるとも思われます。煩悩がお念仏で転化されて今現にお浄土と感知するから、臨終の時に成仏する、近頃そんなことを感じるのであります。煩悩からは一刻も離れないが、念仏がそこを転化して下さる。

又、もうひとつ。人はうぬぼれの強いもので、自分は相当な者と思うているが、仏様から見れば仕様もない者だということであります。

今日この会に出るので富士屋で昼食をしてきたのですがそこで二歳位の女の子がお母さんと食事をしていました。その女の子が私に戯れてくるのです、するとそのお母さんが言うのに「この子はお爺さんが好きでして……」と。私はまだ若いつもりでいます、それを「お爺さん」といわれて……自分では相当なものとうぬぼれていますが、仏様からみれば泥凡夫である、とそんなことを先程感ぜさせられたことであります。

いたずらに年を重ねまして、もう池山先生より二年も年をとりまして……。今日は三年ぶりで皆様のお話を聞きにまいりました。

西元宗助先生が次ぎに大要左の通りお話下さいました。

十日程前に長谷顕性法兄（富山）と久振りでお会いしましたが、皆様によろしくお伝えして下さいとのことでありました。これも同じ頃ですが、昔の京都学生親鸞会の同人で、七高時代からの親友の三股繁さん、今は武蔵野銀行の常務取締役になっておられますが、東京で同人の渡辺種彦さんと一緒しましたが、一道会の皆様にどうぞよろしくとのことでありました。もう一つ、アメリカに私が行きました時、カルホニア州サンジョセの別院輪番になっていられる北条恵実さんからも一道会を非常に懐かしく思っていられて、皆様にどうかよろしくとのことでした。

さて、私は北米仏教団から招かれてアメリカへ参りました、あちらには「慈光」百餘部「自照」四百余部もいっており、その誌友の方々に非常に歓待していただきました。

仏教々会を巡回して最後にミセス松浦未亡人のお宅に厄介になりましたが壁に足利浄円師のお写真が懸っておりました、ベットの中でとめどなく流れる涙を禁じえませんでした、きわまるところ恥かしいのと感謝とで一杯でありました。ロサンゼルスでは清水夫人のお宅で一泊させて頂きましたが九月に羽田空港に着きました。

北米での感想を卒直に申上げます。一つは阿弥陀経の青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、の金言の如く、夫々皆尊いという感懐であります。羽栗行道師や、中井玄道師の影響も目立ちました。あちらで川畑兄、宮地兄

とも一所になったのは愉快でした。そこで話したのですが、夫々有縁の先生によって念仏の縁を頂くのでありますが、自分の先生を尊ぶ者は同時に他人の先生にも頭が下るのは当然でありましょう。自分の親を尊ぶ者は他人の親も同じようにするのであります。只自分の親のことを親爺お袋と呼びすてますが、暁鳥師の歌のように「十億に十億の母あらんとも、わが母にまさる母あらめやも」であります。

第二に感じましたことは、米国ではもう一世の時代は過ぎつつある、二世でも四十才から六十才の年齢でありますそして若い三世になるともう英語しか話せない人々です。そこでお念仏が聞けないし、申す人もすくないのです。

白人の仏教徒にはお念仏が出ません、二、三世の人々もお念仏が出ません。そこで、どうぞお念仏を唱えて下さいと申したのであります。向うでは会の時に、導師によって念仏を三唱します、食事の時も三唱します、そこで若い人々は、念仏は三唱するものとなっております。

聖人の「信心為本（しんじんいほん）」は、法然上人の「念仏為本」の根底の上にあります。米国の仏教信仰はキリスト教的になっておりまして、念仏がありません。浄土教の根本にたちかえってやらねばならぬと存じます。その点シャートルでは中井玄道先生の御教化で「ともかくもお念仏なさい」と教えられておったためにお念仏が出ております。私は開教使の先生方と、まず念仏を申すことから出発しょうと語り合ったのです。

第三に、アメリカでは、日本もそうですが、仏教と道徳とを、身をもってその関連を明らかにして行かねばならない、その時代に来ていると思われます。

米国では、予想以上に仏教が盛んであります、日曜学校も盛大で、北条師のところでは六百名以上集り、自動車百台以上、スクールバスもあり、お賽銭は一ドル（三百六十円）以下のものはありません、いかにも仏教が生き生きしております。

さてあちらで三ケ月四ケ月たち、カ州で二回目の招きを受け、今度は信者のお宅に泊らせて頂きましたが、驚いたことには御仏壇はありますが、「生長の家」の雑誌や書籍があり、生長の家の読書会も催しているとのことです。これは、生きている間は生長の家の教で生活し、死んでからさきは仏教でたすけられる、と考えられていました。仏教信者のうち五〇％或は八〇％が生長の家の信者のところもあります。

このことは米国のみでなく日本も同じ傾向であることを最近知りました。

死んでからお浄土である、又気持のもちようで此世も極

楽であるとよく言います。私はこれに答えたのです。

「煩悩渦巻くここが浄土でありましょうか、否であります。然し本願を信じ念仏申すところ、そこは浄土の入口であります。浄土には、かの世の浄土には入口はないのです、入口は此処にあるのです。曽我先生の『ここがおたすけにあずかる所』、即ち、不体失往生（ふたいしつおうじょう）であって、信心をうるところにお浄土の入口に立たされているということであります」

もう一つ、五月三十日はあちらでメモリアル・デーで、戦歿者追悼の日でありました、それに出席せよとのことで、日本語でよいから遺族にお話をしてくれとのことでありました。私は日本でも滋賀県の方で遺族の追悼法話に参っておりますので、そんな気持でお引受けしましたが、式場で十分ほど前に気付いたのですが、日系戦死者十二人の方々の追悼会で、その人々は、沖縄、アッツ島、フィリッピンの戦闘で、日本軍と戦って戦死された人であります。その遺族の方にお話したのですが、あの時のことは心に深く印象づけられております。

川畑愛義先生のお話が次にありました。

私は隈の方に横着をきめていたが遂に出されてしまったのです。隅の方に居ては神妙に聴けぬとの思召しでありましょう。

今度旅行でチエッコのプラハ、ヨーロッパからアメリカへも行きました。欧州は日本と反対側にありますが、不思議に御縁が開かれました。米国に渡ってもカリホルニヤでロス市の別院でお話をさせられました。無慚無愧の身体をそのままさらけ出しました。

私は小学校の頃まで鹿児島の薩摩半島の山の中に居りましたが、あちらは島津侯の藩内で念仏禁止令があって、かくれ念仏で、山の谷合の洞窟の中などでお念仏し、洞窟には仏像が刻んでありました。そういう有難い土地に生れましたが、忘れもしません、小学校で中学の入学準備をしております時、先生が「君達は入学準備ばかりしているが、入学出来ることも大切だけれど、心の眼を開きなさい、そうすると死もこわくなく、感謝する人間になれる」と教えられました。この一句が中学、高等学校、大学までいつも忘れられませんでした。

京大に入ってから羽溪了諦先生の知四明寮に入りましたが、その頃、花田先生のお念仏を身体で喜んでいるのにあいそれから池山先生を訪い、学生親鸞会とつながり、京都府下の横田慶哉先生とも御縁を得ました。横田先生は動

的、池山先生は静的な念仏者でありました。両先生とも私にとっては無くてはならない有難い先生であります。

池山先生は静かに黙って居られて、語られない時もありましたが、その沈黙が絶対にエネルギーに満ちて、充実した沈黙を感じました。

先生と対坐していますと寂静の中に入らされるようで、私のような者も先生のお姿に対すると、それだけで、仏々相念（ぶつ〳〵そうねん）というか、おのずから先生に接しているだけでお念仏の催しにあずかりました。

私は一寸やそっとでは信仰に入れない頑固者でありました。当時、市内田中西浦町に居りましたが、衣笠へ移り池山先生のお宅に近くすみまして度々お訪ねし、お育てをうけました。今から思うと誠に有難いことでありました。

私はどうしても念仏が申せないのです。池山先生はいつも「池山におきてはただ念仏して」とくりかえして下さるのですが、そこに厚い壁がありましてどうにもならないのです。或る夜、聖人のような御方で難行苦行せられたお方が「親鸞におきてはただ念仏して」と仰言る。アアそうであったか、と念仏が申されるようになりました。

池山先生との御縁はまことに深いのでありまして御臨終までです。御重態の時、内科の辻教授をお迎えして、家内と共に馳せつけました、まことに一寸言葉では言えない程深い御縁でありました。

然し、常々はいつも先生方の御恩も、聖人の御恩も忘れ果てております。さき頃向島先生は自分は親不幸者だと述懐されましたが、私も同じように母を亡くしながらも、親孝行者だと時々思っています、どうも反省の足りない奴だと思っています。

又西元さんはここが浄土の入口だと言われるが、此処には有難い人々が満ちていて浄土のひかりがおがまれる心地がいたします。

バスで「苔寺口」から浄住寺へ参る停留所「山田分れ道」で、大勢の乗客は皆苔寺へ行くために降りてしまうが、私は是処へ来る、先生滅後三十年、年々この会に集る人々は増えてくるようで、奇跡であります、ありがたいことであります。

○

ここで一先ず休憩に入り、いつものように簡単な、所謂一時しのぎの食事が運ばれた。

食事をしながら「ああこの漬物が毎年うまい」と云って食べる人、座が解けて騒がしくなる。活々とした笑いが聞えたりする。

池山先生の御写真、軸物、そして近角先生の軸物、その前で静かなざわめきと満ち足りた安らいとが揺れて、ささ

やかな精進料理に舌鼓を打った。そして身心は甘露の法乳で温まり輝いている人達ばかりのようである。

そんな温いくつろぎの中から質問やら答えやらが自由にとび出しました。その概略を記します。

（N氏）曽我先生は浄土ということは少くとも今生に期待されている。大谷派と本派とは多少違うようですが、金子曽我の両先生とも現在を力説していられると思いますが、いかがですか。

（西元）この世は浄土ではありません、然し浄土への入口浄土への門は此処にある。私には芭蕉の弟子、曽良の句「行き行きて倒れ伏すとも萩の原」をよく味わいます。この世は浄土ではない、現に私は共産国シベリヤの生活も、資本主義のアメリカの現状をも見て来ましたが、此処は浄土ではありません。だが浄土を除けてこの世はない、私を生かしているのは浄土のひかりです。

（向島）私の先刻の話は問題として話したのですが、白井先生何かお話し下さいませんか。

（白井）浄土の問題の前にいのちの問題があります。過去現在未来の流転の問題があります。現実は迷いの世界であって、それが続いて未来へ行きます。仏の智慧でこれを見られると、仏にとってこれは堪えられぬ世界であります。

ここに仏の慈悲があらわれ本願となり、そこから浄土が現われてきます。これは単に精神的な世界ではありません仏の世界が客観的にあらわれる世界が浄土であります。さとりの智慧からあらわれる世界が浄土であります。三世流転の私のいのちと一つになってあらわれてくる。浄土論に出ている浄土は、仏の智慧が客観的にあらわれてくるさとりの世界であります。我々は浄土に往生してさとりをひらいてそこにとどまっているのでなく、還相廻向（げんそうえこう）するのであります。さとりの上から六道四生の迷の世界へ働く、その働く出発点に浄土があるのです。

この世界には戦争があり、煩悩、罪業の世界であって浄土ではありません。ここは浄土の仏の智慧のひびく、ひびいているところで、浄土の入口と思います。

（向島）愚問ですが、命終ってからの浄土とすると、死んだらまいれるとなりますが……。

（白井）このままで死ねば六道四生に流転輪廻（るてんりんね）するばかりですが、ただ仏の教えに遭って、仏の慈悲の力で浄土へ参らしていただける。自性のままならば六道輪廻ですね。死んだら浄土へ参れるとは、仏の教えを信じた上で浄土へ参らせて頂けるのですね。

（向島）聖人も、前念（ぜんねん）に命終（みょうじゅう）して後念（ごねん）に即生（そくしょう）すると云われ又、現生は正定聚不退転（しょうじゅうじゅふたいてん）の位に住すと仰せられていますがその意味を曽我先生などは言われておると思います。

（白井）そうでしょうね。

＝こんどは念仏と信心との関係がでた＝

（N氏）西元先生に申しわけないのですが、私は寺に生れましたが念仏は唱えません、真宗は信心が中心であって、念仏を強調することは時代的にどうかと思いますが……。念仏を強調すると念仏は唱えねばならぬとなって……。

（向島）しかし念仏が出ていないと救われていないのではないのですか?、真実信心には必ず名号を具すともあります。

（N氏）現実のような世界では、唱えなくても救われるのでないと……。そこが法然上人の念仏往生と親鸞上人の信と違うところではないでしょうか。現代のこの世相の中では念仏は申したくないのですが……。

（榊原）それでは念仏せねばならんとなっている?。

（N氏）寺の生れで、今まで寺院生活をしていましたが、現在月給取りの生活をしておりますと、雑然とした仕事の中では念仏など申せません。念仏は念仏申すような場でないと素直に出ません。色々と人々との交わりの中では他の人の立場を考えるとナムアミダブツと申せません。信心為本（しんじんいほん）と言われた意味はどう……。

（向島）念仏を忘れているのは事実ですが、しかしそれだけで終ってはいけません。念仏は申されてくるものです。

（榊原）信心と念仏と分けてみる、けれども信と行は表裏しているもので、申さねばならんのでなく「しかれば念仏も申され候」の念仏です。観念的なものでなくて、心に停らないで肉体的にも出てくるものです、念仏と信心を引きはなすのはどうかと思う……。

（西元）Nさん質問が私の言ったことに原因しておりますのでお答えしますが、北米で念仏をすすめましたのは、日本とは違うのです、日本にはいたるところで念仏の縁がありますが、あちらには伝統がないのです。

（花田）ベルリンに只今浄土真宗会が出来ておりますが、十年余り前に山田宰さんが留学中、あちらの人々に池山先生の独訳歎異鈔をもとにして話をされたのがそのおこりであります。当時、歎異鈔の色々なことはわかるけど、お念仏となるとサッパリ通じないので困った、それにつけましても日本には念仏の伝統があることを非常にありがたく思い、ベルリンの人に念仏が出るようになるには何百年ものこれからの御縁が必要だと痛感したことであります。不思議にもピーパーさんを中心に数人の人々が今では念仏申し

ております。

（向島）慈光誌に出ていましたね。

（花田）今、念仏を申す申さぬが問題になりましたが、真宗のかなめは「聞其名号、信心歓喜の至一念…」と聞くことが中心であります。よしんば一声の念仏が出なくて終ることも必ずすくわれますが、いのちあれば自然と多念になる、私共のはからいではありません。

（N氏）聞くこと……。

（花田）何を聞くのか、名号を聞く、のです。

（N氏）申すことで……。

（花田）それは向うから申されることです。

（国広）私は京都で池山先生のお話をかって聴いたのですが、そのとき前坐の人が念仏して話されましたが、その情熱的なのに抵抗を感じたものです。それで池山先生から一時遠のきましたが、近頃になって、社会的な自分の地位が危くなってくるとか、色々の人生問題に打当って、数は知りませんが念仏しかないと念仏に帰ってきます。それで今のご質問は自分のことのような話でした。

（N氏）念仏を申せと云われると反撥を感じます。現代には違った形の妙好人でないといかんのではないかと思います。現代の若い人にも信を求める人がありますが、念仏をぬきにして、と思いました。

（西元）アメリカでは、「本願」を訳して「ガスペルオブブッダ」つまり「神の救い」のことと同じになってしまいます。大悲の親心でたすかるのですが、それが念仏で具体化する。ナムアミダブツで信となります、感激だけでなく念仏で身に着く、それを言いたかったのです。

（花田）今のお話で思い出しますが、経典を飜訳する時、たとえば「アノクタラサンミヤクサンボダイ」は「無上正真道（むじょうしょうしんどう）でありますが、それではあらわしつくせないので、原語のまま音写してのこされています。ゲエテの語録にも「外国語を飜訳するときどうしても訳せないというところに出て、そこからわかりはじめる」とあります。富士山にしても、日本人がきくそれと、西洋人の聞くそれとは、その内容が全然ちがうので、そこに、ドイツ語はドイツ語でわかるところまで出ねばいけないと思います。次元の違った仏心の世界はナムアミダブツはナムアミダブツでいただく外はないと思います。我々がどんなに智慧や才覚をめぐらしてみても、三角形の角の和は二直角以上を出ませんように、主観的な独善におちてしまうと思います。

大分お話しが高潮しましたが、何となく和やかで、緊張

感で身が引きしまるといったことはなく「どうぞこちらへきて坐って下さい」とか「おあがり下さい」とか「そこをも一人つめて下さい」など食事の運びこまれる騒がしさも続いておりました。またN氏の質問が続きました。

（N氏）先生方の時は学生親鸞会があって若い人々が念仏の信を求められましたが、現在ではキリスト教は盛んに伝道していますが仏教はどうしたらいいのでしょうか。先生方の道を、求められた動機や、信に到られた方法はどうしたか？

（花田）近角先生は二十九才の頃、本山の改革運動に投じられて、本山が駄目、友人がいかぬというところから、遂に自分が悪いと気づかれて、念仏の玄意をきひらかれました。池山先生は社会事業のことをドイツで学ばれて明治三十三年頃労働問題を提唱されましたが、そのうちに自分自身が問題となり、やがて四十二才の時に歎異鈔をとおして念仏門に入られました。絵を描くのにカンバスが入用のように私共の実生活のカンバスの上に信心の絵が出来あがるので、このカンバスを忘れると観念的となり、学問沙汰となります。それですからNさんが今やっている仕事を正視して、そこに念仏を味わって下さい。……。

まだ続いて法談は花ざかりですが、あたりが暗くなって帰路につかれる人々も出てきました。

この夜、松山の岡寛一郎氏夫妻と、三河の山本博雄さんと水上富雄さんが泊られ、夜更けまで法の華が咲き翌朝また続きました。

私は、また今年もこんなによい御縁に遭うことが出来ました、ありがとうございました。どうか来年の一道会までいのちがありますように、そう思う心は切ないものです。

南無阿弥陀仏。

求法用心集

源通寺

声が白道

声が道なり。声のかからぬところへは行けぬ。今度はお声が白道となるなり。

朝夕に口より出ずる仏をば知らで過ぎにしことのくやしさ

○

南無阿弥陀仏　いま呼んで下さるる

南無阿弥陀仏　また呼んで下さるる

あとがき

あとがき

花の四月になりました。卒業に入学に若い人々の新らしい門出を心からお祝い申します。それと共に、目に見えぬ今一人のお方、耳にきこえぬよきひとのみ声ひとつに、早く気づいて頂きたいと、心のはなむけを捧げずには居られません。

さて皆様から一方ならず御心配いただきました私の病状も一応の所置もすみまして、あとは再発のないよう時々診察と治療をうければよいところまでになりました故御放念下さい。病気にかまけましてねんごろな御見舞いただきながら疎々御礼も申し上げないでおります段、重々おわび申し上げます。

○

近角先生の自然法爾の御さとしは、求道の初期におのべ下さったものであります。私自身いつも愚考いたしますことは、源信僧都の横川の法語、法然上人の一枚起請文に相応するものが、親鸞聖人の自然法爾章にあたるということであります。しかし聖人のこの信境は文字通り円熟しきられたもので、唯仰ぎ、唯信ずるという外はありません。九十年の聖人の生涯、その一切が念仏無碍の光益にとけて、満月のようにかがやく金句であります。

東京の石心居士から「救われぬもの」の題で御自身の近角先生からうけられた信の歩みを御寄稿頂きました。

○

病中、西元宗助様から「当面の浄土教の課題」の原稿をいただき、引き続いて「アメリカの妙好人」の起草をして下さる由、ありがたいことであります。

更に滋賀県の藤井厳様から「江近学園に陛下が御巡回された時のエピソード」を頂き、感謝しております。

これらはみな私の発病をすでに御存じになっていての冥々のうちの御恵みといただいております。五月号にいただきます。

○

――病中、かねておきした言葉が浮ぶままに――

「どうあろうとお見捨てないみ仏のますます限り安心して何処へでも行けるでないか。」

お案内

四月一杯休ませて頂き五月から一道会その他の講話をはじめさせて頂きます。

花田

慈光　第二十巻　第四号　昭和四十三年四月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月十三日第三種郵便物認可

定価　半年　二百五十円（送共）
　　一年　五百円（送共）
編集・発行人　花田正夫
　　名古屋市南区駈上町二ノ八八
　　電話八二一局七〇三七番
印刷人　本田政雄
　　愛知県西加茂郡三好町大字福谷
発行所　慈光社
　　名古屋市南区駈上町二ノ八八
　　振替口座名古屋一〇四七〇番